

福島第一原子力発電所5・6号機の現状について

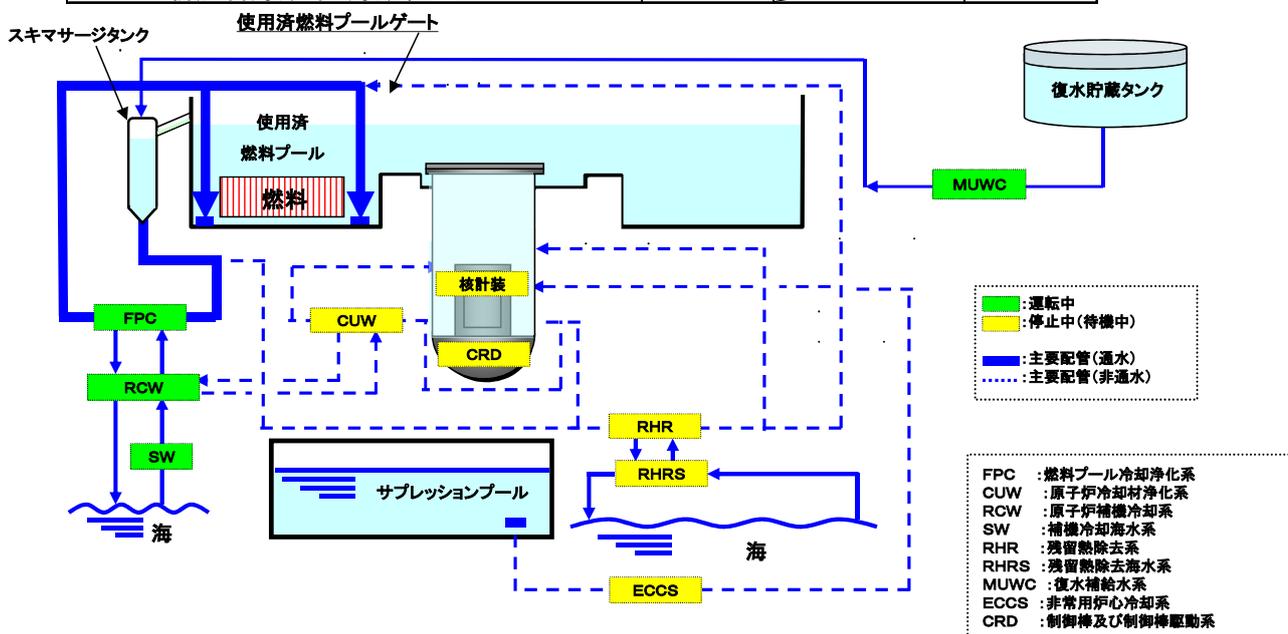
2015年6月25日
東京電力株式会社



1. 使用済燃料の冷却(5号機)

■燃料は使用済燃料プールに移動が完了し、冷却継続中。

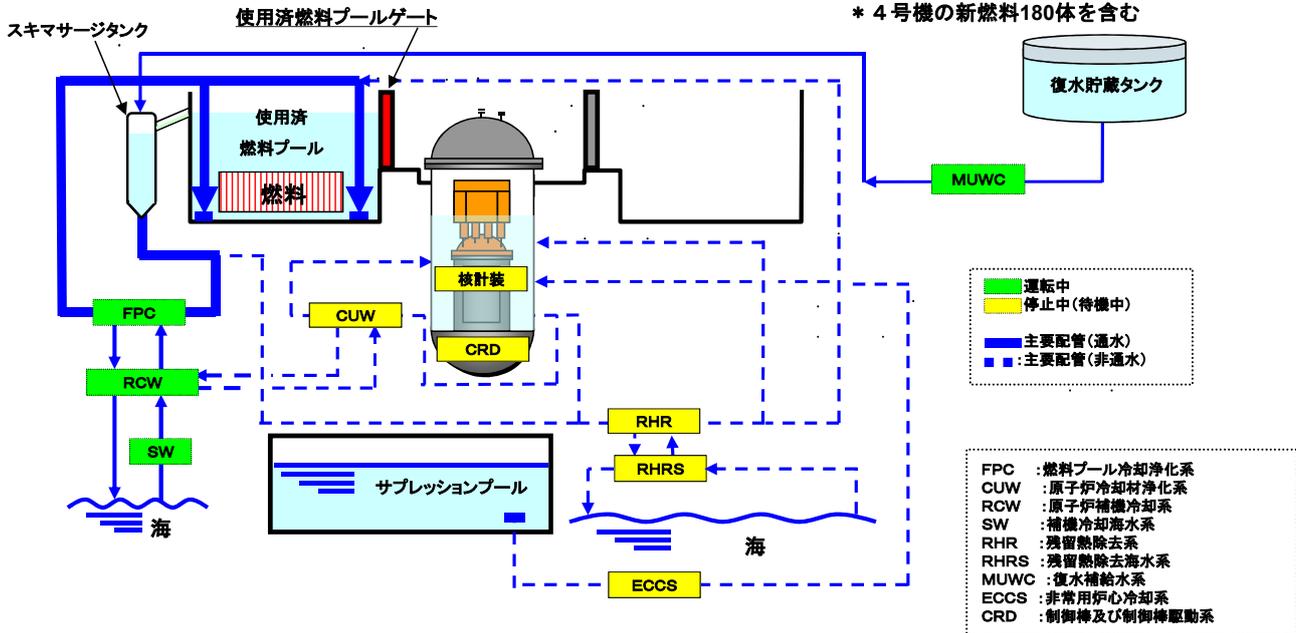
貯蔵場所	新燃料数	使用済燃料数	総数
原子炉圧力容器	0	0	0
使用済燃料プール(貯蔵容量:1590)	168	1374	1542
新燃料貯蔵庫(貯蔵容量:170)	0		0



1. 使用済燃料の冷却(6号機)

■燃料は使用済燃料プールに移動が完了し、冷却継続中。

6号機 燃料貯蔵状況		(単位:体)	
貯蔵場所	新燃料数	使用済燃料数	総数
原子炉压力容器	0	0	0
使用済燃料プール(貯蔵容量:1770)	198*	1456	1654
新燃料貯蔵庫(貯蔵容量:230)	230		230



2. 滞留水処理の状況

震災により、建屋内には大量の海水及び地下水が流入し炉冷却設備用電源が水没する可能性があったため、復水器・タンク・メガフロートへの移送で回避した。

5・6号機は燃料等は健全であり建屋内滞留水の放射性物質濃度は低レベルである。現状、原子炉建屋は排水及び止水処置により滞留水は無く、タービン建屋・6号機原子炉建屋付属棟で継続する地下水流入に対応するため、海水淡水化装置(RO装置)で浄化した上でCs134,Cs137,Sr90(もしくは全β),H3の告示※濃度比の合計が0.22を下回ることを確認し、散水を行っている。

現在の滞留水の全体量は、約32,000m³(H27.6現在)であり、建屋周辺の地下水が、継続して流入している(現在の流入量:約45m³/日)が、RO装置により至近の実績では約60m³/日程度散水しており、全体量としては安定して減少傾向にある。

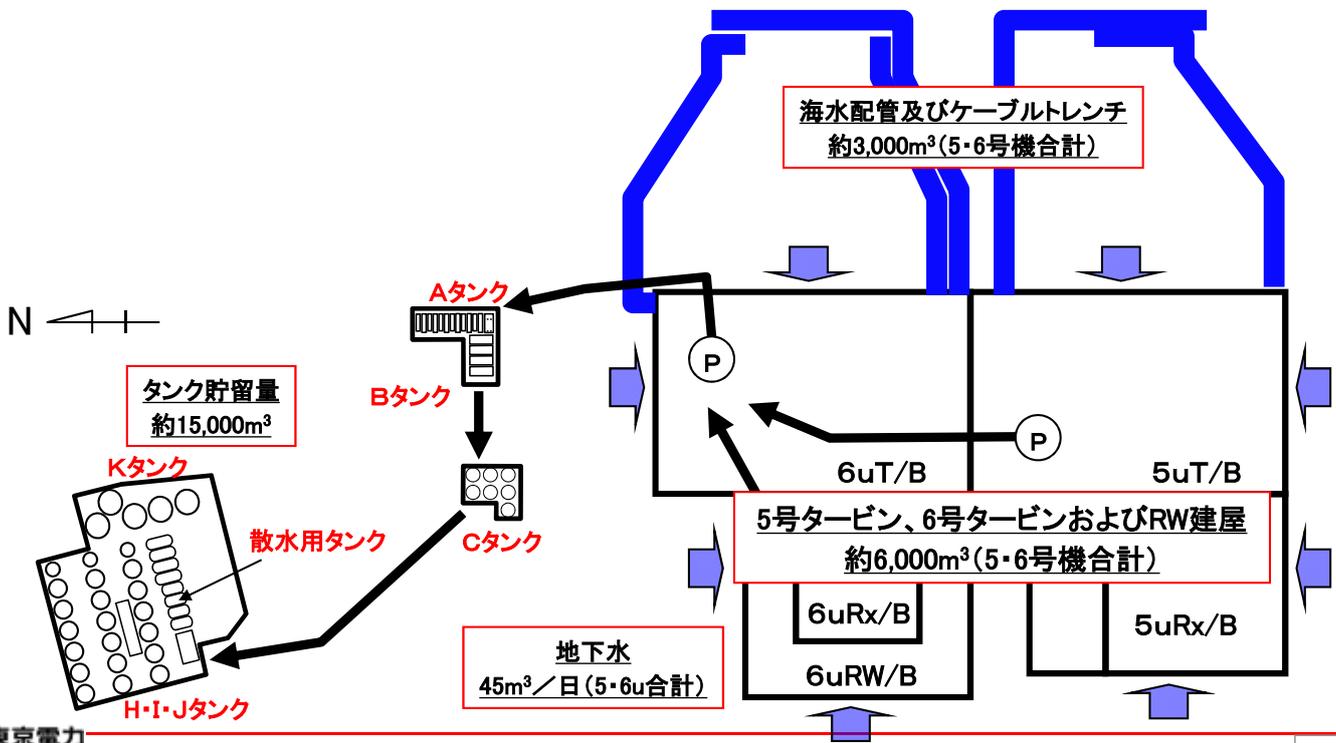
※: 実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則の規定に基づく線量限度等を定める告示

2. (1) 滞留水量の現状

5・6号機滞留水の合計約32,000m³(H27.6現在)

メガフロート
約8,000m³(ろ過水)

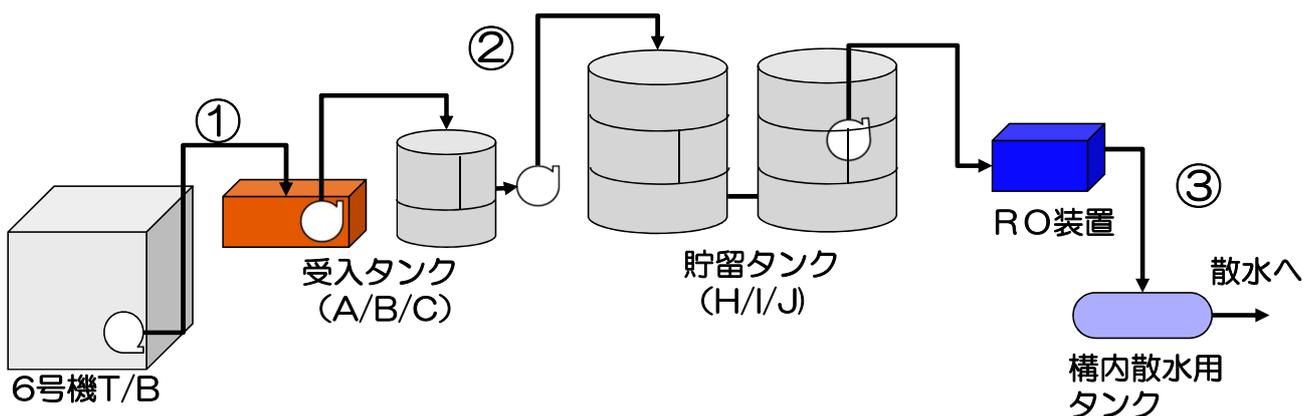
海



2. (2) 滞留水処理の流れ

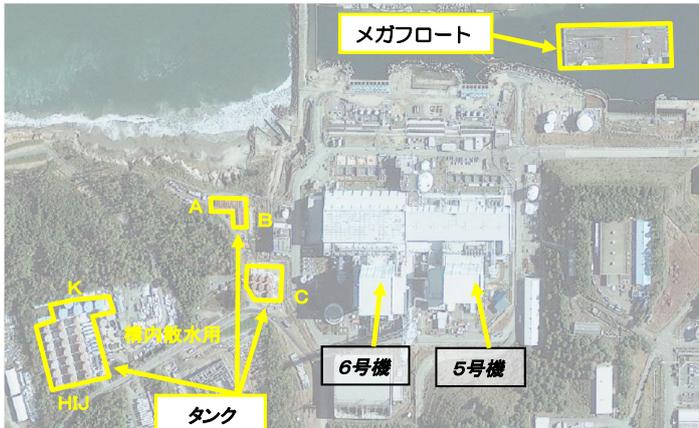
■ 5・6号機内の滞留水は以下の流れで処理している。

- ① 建屋内の滞留水は、6号機T/Bから屋外の受入タンクに移送する。
- ② 受入タンクエリアで油分分離され、貯留タンクに移送する。
- ③ RO装置にて処理され、放射能濃度を確認し、散水する。



2. (3) 滞留水貯留設備の現状

- 5・6号機の滞留水貯留設備は、6号機北側に設置されている。また、メガフロートは港湾内に係留されている。



「提供：日本スペースイメージング(株)、(c)DigitalGlobe」



No	タイプ	基数	容量 (m ³)
A	角形溶接	12	462
B	角形フランジ	4	440
C	円筒形フランジ	7	1,200
H I J	円筒形フランジ	21	10,041
K	円筒形溶接	5	5,500
構内散水用	丸形横置き溶接	8	520
	メガフロート	1	8,000

2. (4) 滞留水の濃度

各エリアにおける滞留水の濃度

平成27年3月現在

	H I Jタンク	Kタンク	ABCタンク	6号機T/B建屋	メガフロート
塩分濃度 (PPM)	19,000	4,200	240	240	200
放射能濃度 Cs-134 (Bq/L)	46.9	29.0	7.4	7.4	1.9
放射能濃度 Cs-137 (Bq/L)	173.0	83.0	27.0	27.0	5.2
放射能濃度 H-3 (Bq/L)	1,031	1,887	852	852	ND (<106)
放射能濃度 全β (Bq/L)	3,106	ND (<8.3)	188	188	19
備考	代表：Iタンク		* 6号機建屋濃度と同様		

2. (5) 滞留水量の推移

■ 昨年9月からの滞留水の総量は以下のとおり

5・6号機滞留水量の推移

